

八乙女山の風穴と風神堂

井波町では、三月頃から七月頃にかけて井波風あるいは八乙女おろしと言われ、時には風速四十mを超える局地風が吹き荒れることがあります。この風は、古来より八乙女山頂にある風穴から吹き出すと言われています。

今から千二百年ほど前の奈良時代の頃、加賀の白山を開いた越前の僧泰澄大師(たいちようだいし)が、この地を訪れた折、里人の願いにより八乙女山の頂に風神を封じ込めるために風穴にしめ縄を張りお堂を建て、祈禱しました。おかげでその後、大風が吹かなくなりました。

やがて、八乙女山の麓に止観寺という天台宗の



八乙女山風神堂

お寺ができ、人々の信仰を集めていました。ところが、福光城主の石黒という武士が、この止観寺に参詣の折、僧泰澄大師が風神を封じ込めたという言い伝えを聞き、それを確かめようと八乙女山に登り、しめ縄を刀で切った。たちまち雷雨を交えた大風が吹きすさび、石黒主従は谷底に吹き落とされ、命からがら逃げ帰りました。その後、再び強風が吹きまくるようになりました。やがて、瑞泉寺を建立し綽如上人は、里人の嘆きを救おうと、お堂を再建し浄土三部経というお経を納めると、不思議にも風があまり吹かなくなりました。

このお堂も、その後落雷で焼失しましたが、現在は有志の方の寄進により再建され、毎年六月第一日曜日に風封じのお祭りが行われています。